

【神奈川】「終末期患者の部屋を見回すと…」開業医が眼科在宅の必要性に気付いた瞬間-菊地琢也・菊地眼科クリニック院長に聞く◆Vol.1

2022年11月4日（金）配信 m3.com地域版

「終末期患者の部屋を見てはっとした」――。2014年の開業時から在宅医療を行う「菊地眼科クリニック」（川崎市幸区）の菊地琢也院長は勤務医時代、緩和ケアの診療に立ち会ったことで在宅での眼科診療の必要性に気付いたという。眼科で在宅医療を行っているクリニックは少ないが、菊地院長は現在、外来をメインにしつつも非常勤医と協力して120人ほどの患者に対応している。眼科在宅医療の現状と可能性は。（2022年9月26日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



菊地琢也氏（クリニック提供）

――まずは、菊地眼科クリニックの患者数とスタッフ体制をお聞かせください。

当院は2014年、JR南武線・鹿島田駅から徒歩5分の場所に開院しました。現在の外来患者数は1日60人ほどで、スタッフは17人います。内訳は、医師が私と非常勤の女性医師1人、事務6人、看護師4人、視能訓練士（ORT）4人、理学療法士（PT）1人です。眼科に理学療法士が在籍するのは珍しいと思いますが、これは2021年6月に訪問リハビリテーション部門を開設したためです。

祝日を除いて全日診療していることも特徴で、土曜日は午前外来、午後手術を行っています。土曜日に手術を行っているのは会社員などの患者さんが来やすいうえ、家族も付き添いやすいためです。手術を受けることは多くの患者さんやご家族にとって不安を伴うものなので、こうしています。日曜日も診療しているのは、術後に何かあったときの備えの意味もあります。角膜移植を除き、眼科で行う手術はほとんどできるようにしています。

――先生は開業以来、継続して在宅医療を行っていると聞きました。

はい。週に3日、月・火・水曜の昼の休診時間に私が居宅を訪問しており、女性の医師が隔週月・水の午後に施設を訪問しています。私が訪問する際の体制は私とORT、看護師の3人です。看護師の代わりに事務が同行することもあります。車の運転は私が行いますが、女性医師のときは運転士をお願いしています。

訪問数について、居宅の方は1日2人ほどで、月に計15人ほどです。施設はおおよそ10の特別養護老人ホームや介護老人保健施設などを対象に1回に3、4人診るときもあれば10人診ることもありばらつきがあります。計120人ほどの在宅患者さんがいる状況です。

在宅患者さんやそのご家族の要望は幅広いですが、「（白内障や緑内障などで）見えづらい」「目やにがよく出る」「眼鏡が合わない」といったものが目立ちます。



同院の機器で視野検査を受ける施設入居者（クリニック提供）

——在宅医療を行っている眼科医はまだ少ないと思います。先生はどのような経緯で始めるようになったのですか。

確かに、私が開業したころに在宅医療を行っている眼科は珍しかったと思います。近年になって少し増えてきたものの、内科医に比べればとても少ないですね。

着想のきっかけは、私が眼科を専門にしようと思った出来事にさかのぼります。卒後4年ほどしたころに緩和医療を学ぶ機会があり、ある40代の女性患者さんと出会いました。その方は乳がんが骨転移しており、体を動かすだけで骨折する可能性がある状態でした。寝たきりの生活を送っていたわけですが、目が留まったのはその方の部屋に飾られていた多くの男性の写真です。ちょうど韓国ドラマの「冬のソナタ」がはやっていたころで、主演のペ・ヨンジュンさんのファンだったのです。その方は結婚しており、ご主人がいました。趣味としてドラマを見ることをとても楽しみにしていました。

患者さんはまだ40代だったので目の病気を抱えてはいませんでした。が、「これが目の病気になりやすい70、80代だとどうだろう」と私は想像しました。体を自由に動かさず、在宅での療養生活を余儀なくされている。そんな人にとって、家族の顔を見たり、外の風景を見て季節を感じたり、テレビや映画、インターネットを楽しんだりするのは生きるうえで大きな喜びになるのではないかと。目で見られないと、生きる気力をなくしてしまうこともあるかもしれない。眼科医療の価値をこう感じ、在宅での診療の必要性に気付きました。

——それは印象的な出来事ですね。眼科を専門にした後、在宅医療を初めて経験したのはいつだったのですか。

2010年から開業まで勤めていた総合高津中央病院（川崎市高津区）時代です。患者さんの中に80代の高齢男性がおり、緑内障のために通院していました。患者さんは気の良い人で私も馬が合いましたが、出会ったころから肺を悪くしておりやっとの思いで病院に通っている状態でした。酸素供給装置を身につけていたため、健康な人であれば自宅から15分ほどで着くところ1時間ほどかけていました。

患者さんの体調は徐々に悪くなり、やがて口からご飯を食べられなくなって胃ろうで栄養を補給するようになります。もう、病院に通える状態ではありません。ご家族から現況を伝えられ、「どうしたらいいか」と相談された私は病院の了解を得、ご自宅への訪問を始めました。

慣れ親しんだ家で過ごす時間が増えたためでしょう。患者さんは在宅医療に切り替えてから元気になったようでした。「（先生が）来てくれるのがとても楽しみ」とも言ってくれました。医療的にできることはあまりない状況でしたが、ご家族も私の訪問を喜んでくれました。「開業したら在宅もやろう」。在宅医療の可能性を感じました。

◆菊地 琢也（きくち・たくや）氏

2000年東海大学医学部卒。2004年昭和大学大学院修了。昭和大学病院や総合高津中央病院などを経て、2014年に「菊地眼科クリニック」を開院。開業時から在宅医療を行っており、2021年には理学療法士による訪問リハビリテーションも始めた。日本眼科学会眼科専門医、昭和大学眼科兼任講師など。

【取材・文 = 医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

